

「男、突っ走る！」

第2回

第一稿

作・壽倉 雅



1 中央高校・全景（朝）

N「ゴールデンウィークという連休もあつと  
いう間に終わってしまい、気が付けば高校  
入学から一ヶ月が経ちました」

2 同・1年2組教室

雅也が登校してくると、席に座る――  
前後の席の賢哉と瞬に、

雅也「おはようッ」

賢哉「ういーす」

瞬「おはよう」

雅也「ねえねえ、これ見て」

訝しそうな顔の賢哉と瞬――雅也、靴  
から携帯電話を取り出す。

雅也「じゃん。とうとう俺も携帯デビュー」

賢哉「お、ついにか」

瞬「やったねえ」

雅也「これでようやく俺もみんなと連絡とれ  
る。メアド交換しよう」

賢哉「良いぞ」

瞬「オッケー」

賢哉と瞬、携帯電話を取り出して、雅也とメアドを交換する。

賢哉「俺たちは中学校から携帯持ってたけど、これまでどうしてたの？」

雅也「パソコンのアドレスは作ってたから、それでやり取りしてた」

賢哉「そうなのか？」

雅也「うん。チャットとか、結構パソコン使ってる友達が多かったし、俺もパソコン部の部長やってたから結構当時から使うことが多くて。だから中には、こっちがパソコンのメールで向こうが携帯のメールっていうパターンもあったよ」

瞬「不便じゃなかった？」

雅也「そりゃ、家に帰ってからパソコン開くから、緊急のメールなんて気づかないよね。まあ学校に携帯持ってくるのは当然ダメだったから、結局急ぎのメールなんて来なかったけどね。あ、でも写真は送れなかった

たから、それが唯一の不便だったかなあ」

と、クラスメイト・濱口寧々（16）が  
登校してくる。雅也、濱口のところへ  
行くと、

雅也「濱口、俺もとうとう携帯デビューだよ」

寧々「これでパソコンのメール開く手間も省  
けるってわけだ」

雅也「ああ」

寧々「メアド教えて（と携帯電話を取り出す）」

N「この子はクラスメイトの濱口寧々。何故  
か分からないけど、入学後まもなくお互い  
に話すようになり、パソコンのメールも教  
えていました。今ではクラスに欠かせない  
大切な女友達です」

### 3 同・職員室

学年会議が行われており、佐藤が話し  
ている――安代、稲森をはじめ、各教  
師たちは自分のデスクに座っている。

佐藤「入学からまもなく一ヶ月が経ちます。

生徒たちも、学校生活に慣れてくるころだ  
と思います。緊張感も少し抜けてくる時期  
なので、学校のルールを破る生徒諸君も出  
てくると思いますが、先生方におかれまし  
ては、くれぐれも指導をよろしく願いまし  
ます。特に携帯電話の取り扱いについては  
念入りをお願いします。高校に入学したの  
を機に携帯電話を持つ生徒も増えてくる  
と思いますので、気を付けるようにしてく  
ださい」

教師たち「はい」

#### 4 同・1年2組教室

安代が社会科の授業をしている――黒  
板を見ながらノートを写している生徒  
たち。と、誰かの携帯電話の着信が鳴  
る。

シーンと静かになる教室。しかし誰も  
名乗りをあげない。

安代「誰ですか、携帯電話の電源切ってない

のは」

一同、黙ったままである。

安代「名乗らないと、授業再会できませんよ」

と、悠喜が鞆から携帯電話を取り出す。

悠喜「(渋々) すいませんでした」

安代「一週間、学校で預かります」

悠喜「(不服そうに) ……」

## 5 同場所 (時間経過)

雅也、賢哉、瞬、悠喜が弁当を食べている。

雅也「とんだ災難だったね」

悠喜「しょうがねえよ。まあ、一週間の辛抱

だ」

賢哉「あ……実況見なきや」

雅也「実況」

悠喜「まさか、ボートレース？」

瞬「かどけんが見る実況って言ったたら、ボートレースしかないだろ」

賢哉、携帯電話を取り出すと、競艇実

況を見始める——物珍しそうに見ている雅也。

N「この一ヶ月で、当初はあまり良い印象を持っていなかったクラスメイト・志田悠喜君ともこうしてお昼ご飯と一緒に食べる仲になりました。確かにちよっぴりやんちゃな一面もあるかもしれないけれど、話してみると面白い子でかどけんやきのじゅんともすぐに仲良くなれた。かどけんといえば、ここ一ヶ月で分かったのは彼が親の影響でポートレースを見るのが好きだということです。当然、高校生は賭け事なんてできないが、おそらくかどけんのことです。法律的にはアウトだけど、舟券は買っているかと思われます」

## 6 木内家・居間（夜）

雅也、真保、健次郎が夕飯を食べている——と、雅也の携帯電話が鳴る。雅也、携帯電話の画面を見る。賢哉から



の電話である。

雅也「(真保に)クラスの子から電話。(と電話に出て)もしもし、かどけん。どうしたの？ え、明日の時間割？ ちよっと待ってね。(と鞆から手帳を取り出すと)一時間目から順番に言ってくよ。数学、体育、英語、音楽、情報、現代文。うん、時間割変更もないし、宿題は毎日の課題っていうプリント一枚だけ。ちゃんとやるんだよ。じやあね(と電話を切る)」

真保「携帯電話買ったら、すぐこれだもんね」  
雅也「しよがないでしょ。何故かアテにされてるんだから。でも、こういう時携帯電話って便利だよ。家の固定電話にかけなくても、その人に要件があれば直接携帯電話にかけれるんだもの」

健次郎「良いな。俺も早く携帯電話ほしい」  
真保「小学生に携帯電話なんて早すぎるわ」  
雅也「俺も高校生になったら買ってもらえるかもしれないぞ」

健次郎「つまんないの」

雅也「さすがにお前の同級生じゃ、携帯電話  
持つてる子いないだろ」

健次郎「いるよ。子ども携帯って、GPS機  
能つきの携帯」

雅也「ああ。塾とかの送り迎えにって、親が  
持たせてるやつな」

真保「あんたは塾も何も習い事してないんだ  
から、そんなもの必要ないでしょ」

雅也「確かに、今の健にはまだ必要ないかも  
な」

面白くない顔の健次郎。

## 7 同・雅也の部屋

雅也が宿題をしている——と、雅也の  
携帯電話にメールの通知が来る。雅也、  
携帯電話を開く。メールは瞬からであ  
る。

瞬の声「うっちー、夜遅くにごめんね。明日  
の時間割教えて」

雅也、メールを打ち始める。

雅也の声「明日の時間割だよ。一時間目数学、二時間目体育、三時間目英語、四時間目音楽、五時間目情報、六時間目現代文。よろしくね」

と、メールを送信すると、携帯電話を閉じ、宿題を進める。

またメールの通知が来る。再び携帯電話を開く雅也。メールは瞬からである。

瞬の声「ありがとう！ おやすみ、また明日」  
雅也、メールを確認すると、携帯電話を閉じて、再び宿題を進める。

N「携帯電話を持つようになり、クラスの子ともメールアドレスや電話番号を交換するようになってから、何故か僕のところには時間割や持ち物の確認など、業務連絡的なメールや電話が頻繁に来るようになりました」

## 8 同場所（数日後）

雅也が勉強をしている。

N「ある夜には、こんな電話がかかってきました」

雅也の携帯電話に電話がかかってくる  
——相手は賢哉である。雅也、電話に出ると、

雅也「もしもし、かどけん？ どうしたの」  
賢哉の声「あのさ、国語のワークの答え教えてほしいんだよ。ワークの答えが載ってる冊子、見当たらないんだよ」

雅也「(携帯電話に)え、まさかなくしたの？  
ちよつと待ってね。(と机の棚から問題集の解答冊子を手にとると)何ページ？」

賢哉の声「十四ページと十五ページ」  
雅也「(冊子を見ながら)じゃあ答え言ってくよ」

賢哉の声「どうぞ」  
雅也「一番エ、二番ウ、三番ウ、四番ア、五番イ、六番オ。もう一回上から言ってくよ。  
エ、ウ、ウ、ア、イ、オ。これで良い？ あと大丈夫」

賢哉の声「大丈夫、ありがとう」

雅也「じゃあね、はい」

と、電話を切ると、勉強を進める。

9 中央高校・全景

10 同・1年2組教室

雅也が賢哉、瞬、悠喜と話している。

雅也「かどけんもきのしゅんも、いつも時間割教えてくれとか、ワークの答え教えてくれとか、そんな要件ばっかで連絡してくるんだよ」

賢哉「わりーかよ」

雅也「時間割ぐらい確認しときなよ。基本的にはあの時間割で変更はないんだから」

瞬「でも、なぜか確認しちゃうんだよね」

雅也「そりゃ俺が登校してるから良いよ。けど、体調不良で休んだらどうするの？ その状態で俺に確認電話なんてしてこないだよ」

悠喜「まあ、木内が休む可能性だってあるもんな」

賢哉「けど、どうせお前に連絡するのは俺かきのじゅんぐらいだろ」

雅也「残念ながら、最近良樹もかっちゃんも俺にメールしてくるの。(と少し離れた席で談笑している良樹と一磨に)ねえ、良樹。この間、俺に英語のノート見せてほしってメールしたよな」

良樹「ああ。助かったよ、あの英語の予習ノート。日本語訳、ほぼ完璧だったもん」

雅也「そりゃ、結構時間かかったもんあの予習」

一磨「今度は俺にも見せてね」

雅也「かっちゃんだったら、自分でできるでしよ」

笑い合う雅也、良樹、一磨。

賢哉「(雅也に)なあ、あの二人とは中学校から一緒なんだろ」

雅也「うん。良樹とは中一と中二が隣のクラ

スで、中三で初めて一緒のクラスになったの。かつちゃんは一年生の時にクラスが一緒だっただけで、あとは一回も被らなかつたんだけど、俺がパソコン部でかつちゃんが書道部だったから文化部の繋がりはある。つたんだよね」

賢哉「へえ」

雅也「かどけんたちも、話せば良いのに。そりゃタイプは全然違うけど、二人とも温厚で良い子だよ」

悠喜「まあ、少し話すぐらいなら良いかもしれないな」

雅也「同じクラスなんだから、仲良くやってよ」

賢哉「良樹、あいつに似てるんだよな」

雅也「あいつって？」

瞬「原西のこと？」

雅也「誰、原西って？」

賢哉「同じ中学校出身のやつで、今確か一年四組にいるの」

雅也「へえ、今度紹介してよ」

賢哉「いや、お前は合わないと思うぞ」

雅也「どうして？」

賢哉「結構自分勝手というか、デリカシーがないというか」

雅也「法律破ってるかどけんが何言うか」

賢哉「え？」

雅也「この間、鞆取ってくれて俺に言ったでしょ。あの時、チャックが開いててふと見たら、競艇新聞と煙草が入ってるんだもん。高校一年の男子高校生の荷物じゃないよ」

賢哉「競艇場は、俺にとって第二の庭なんだよ。母親の腹の中にいたときから、あのボートのエンジン音を聞いてここまで育ったんだから」

雅也「へえ。あ、それでその原田って子はあまり友達にならないほうが良いの？」

瞬「俺もオススメしないな」

雅也「二人が言うんだから、間違いないか」



悠喜「いろんな奴がいるからな、この学校も」

雅也「そういえば志田、携帯返してもらったの？」

悠喜「昨日ようやく」

雅也「良かったね」

悠喜「俺、生徒指導室のやつ嫌いだよ」

雅也「（苦笑して） 奴って、先生でしょ」

悠喜「けど、ブログとかネット監視すごいんだから、あそこの先生たち」

雅也「あ、確かに……」

悠喜「何か言われたのか？」

雅也「ゴールデンウイークにさ、かどけんときのしゅんと、北緑駅近くのカラオケに行つたんだよ。で、その時の様子をきのじゅんが自分のブログにアップしてたんだよ」

瞬「ああ。うちーがカラオケしてる写真と、他に何枚か写真あげたよ」

雅也「多分それ見たんだろうね。『お前この間カラオケ行っただろ』って生徒指導の先生に言われたもん」

悠喜「マジ？ そんなストーカーみたいなことしてるの、あそこの奴ら」

雅也「まあ、今はネットトラブルも多いからね。個人情報の流出とか、掲示板での誹謗中傷とか、自分の知らないところで自分の全く知らない人に悪口書かれてることもあるからね。生徒指導部が目を光らしてるのも無理ないけどね」

賢哉「けどだからって、ネット監視はやりすぎじゃねえか」

雅也「きのしゅんなんて、堂々と『きのしゅんのブログ』って名前でアップしてるし、きのじゅんっていう個人を特定する情報とかを書いてたらすぐに分かっちゃうんじゃない」

賢哉「そういうことか」

雅也「気を付けなよ。誰が見てるか分からないし、先生の目だつてあるんだから」

瞬「そうだね。うちーがやってるブログは、個人を特定しないようになってるもんね」

雅也「そこはすごく気遣ってるもん。だから特定の固有名詞とか、個人が分かるような情報は一切あげてないもん」

賢哉「きのしゅんは、将来俳優志望だからな、少しでも自分を売り込みたいんだろ」

雅也「え、きのしゅん俳優志望なの？」

瞬「俳優っていうか、芸能人になりたいって思ってる。演技も歌もマルチに活動できるような」

雅也「へえ、すごいね」

瞬「オーディションとかも、一応探してるんだ」

雅也「本格的じゃん」

瞬「うちーは、何か目標とかないの？」

雅也「物語書くのは好きだし、ドラマも好きだけど、それはあくまで趣味だからね。パソコンが好きだから、何かそういう資格でも取って、事務系の仕事にでも就こうかなって思ってる」

悠喜「ああ、木内なら似合いそうだわ」

雅也「でしょ。一応、中学の時にP検の4級は取ったの。だから、3級とか頑張って2級までは行きたいかな」

悠喜「創作活動もやって、勉強とか資格とか、すげえな」

雅也「志田は、何か趣味とかないの？」

悠喜「俺はロックバンドが好きでさ、趣味で弾いてるんだよ」

雅也「楽器弾ける人、憧れるわ」

悠喜「俺も別に大して弾けるわけじゃないんだけどさ、好きだから適当にやってるんだよ」

雅也「まあ俺も、執筆活動は趣味だからね。別に文章力が良いわけじゃないし、作文コンクールなんて賞取ったことないし」

悠喜「でも書けるだけの力があるんだから、それでもすげえよ。俺なんて、文章書きたくねえもん」

雅也「昔から国語の成績だけは良かったんだよねえ」

瞬「そうだ。俺が芸能界デビューしたら、その時はうちーに脚本書いてもらおう」

雅也「え、俺？」

賢哉「それは良いかもしれないな」

雅也「書けるかな、俺に」

賢哉「みんなで創作活動するのも良いんじゃないか。例えば、俺がプロデューサーになつて、木内が詞を書いて、志田が音楽をつけて、きのじゅんが歌うっていう」

雅也「かどけんつてさ、頭が悪いのか良いのか分からなくなる瞬間あるよね」

賢哉「そうか？」

雅也「うん。悔しいけど、今のアイデアは最高だつて思った」

賢哉「せっかく高校入ったんだ。ただ勉強するだけじゃつまらないだろ。高校生のうちにしかできないこともある」

雅也「競艇は別でしょ」

賢哉「まあな。でも、こうやってクラスの中からこそできることもあるからさ。そう

やって学校生活楽しまなきや」

雅也「そうだね」

と、チャイム音が鳴り、それぞれ席に着く——ドアが開き、安代が入ってくると、一同起立をして、朝の挨拶をする。

一同「おはようございます」

安代「おはようございます。着席してください」

と、座る一同——業務連絡を話している安代。

N「かどけんの言葉に、僕は心を動かされませんでした。確かに高校生のうちにしかできないことがある。このクラスだからこそ、できることがある。勉強に偏っていましたが、楽しむ時間も大事であるということをして、この朝僕がかどけんから教わったのでした」

つづく